

平成 31年 4月 10日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880050

氏名 横山 克貴

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ハミルトン (国名 ニュージーランド)
2. 研究課題名 (和文) : 外在化する会話が促す想起の質 —過去の自己の現れ方に着目して—
3. 派遣期間：平成 30年 4月 1日 ~ 平成 31年 3月 31日 (365日間)
4. 受入機関名・部局名：ワイカト大学 教育学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究は、ナラティブ・セラピーというカウンセリング技法に特有の、「外在化する会話」という特殊な言葉遣いを用いた会話の中で、過去の経験や過去の自己がどう想起されるかを質的に検討するというものである。そのために、まずは受入機関である Diversity Counseling New Zealand (DCNZ) の協力を経て、同グループが主催したナラティブ・セラピーのワークショップ内で行われた、参加者間のナラティブ・セラピーの会話のロールプレイを通して、外在化する会話の想起が通常の会話における想起とどう異なったかを、参加者からの自由記述式のアンケートを通してデータ収集を行った (研究 C-1)。13名の参加者からの回答を得て、これをもとに予備的な分析を行った。

その後、ロールプレイではなく実際のカウンセリングにおいて、「外在化する会話」がどのような質の想起をもたらすのかを明らかにするために、研究者自身が実際にカウンセリングを提供し、データ収集を行った (研究 C-2)。具体的には、2018年8月~2019年3月にかけて、ニュージーランドか日本在住の日本語話者を対象に、研究者自身がナラティブ・セラピーのカウンセリングを実施し、そのセッションの録音をデータとして収集した。なお、それにあたっては研究者自身がナラティブ・セラピーというカウンセリング技法に習熟する必要があった。そのため、研究者は、受入機関であるワイカト大学の、2年間のカウンセラー養成コースの全てのクラスと、DCNZ の主催するナラティブ・セラピーの研修に参加し、このカウンセリング技法に習熟した。最終的に、研究目的でのセッションの録音を承諾した26名分、約140回分のセッションのデータが得られ、うち16名からは、外在化する会話を用いたカウンセリングセッションで、過去の体験がどう想起されたかについて、自由記述式のアンケートへの回答を得た。

また、本研究を進めるうちに、外在化する会話においては、カウンセラーの質問とクライアントの応答の間で生じる生成的なプロセスが、カウンセリング自体の質に与える影響の重要性が認めら

(様式7: 電子媒体)
(若手研究者海外挑戦プログラム)

れた。そこで、現地のナラティブ・セラピストの実際のカウンセリングの逐語録をデータとして得て、事例分析的な会話分析も行った（これを研究Dとする）。

その他、ワイカト大学で以前より継続的に行われていた、「Re-membering conversations」「Men and mental health」の、2つの研究に参加、協力を行った。なお、これまでの研究で行っていた、「人称代名詞」が促す想起体験の検討（研究B）について、ポルトガルで行われた 10th international conference on the dialogical self でのシンポジウムと、ワイカト大学の当該コースの博士課程で、年1回行われている後期博士課程学生の研究ワークショップにて、発表とディスカッションを行い、その内容の検討、ブラッシュアップを行った。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究 C-2 で得られた、26 名分、約 140 回分のカウンセリングセッションの録音データについては現在、逐語録化してデータを整理しながら、質的な分析を進めている。今後は、国内外の学会での発表や、論文としての成果発表を行っていく予定である。この研究がまとまったのちは、これまでの研究で行ってきた「時制」が促す想起体験の検討 (研究 A)、「人称代名詞」が促す想起体験の検討 (研究 B) と併せて、カウンセリングにおいて、自分の経験を語る際の言葉遣い (言語の形式的な側面からのアプローチ) が、その経験の想起の質に持つ影響力について比較検討し、論考としてまとめ、これも学会発表、投稿論文としてまとめていく予定である。

また、本プログラム中に新たに行った、現地のナラティブ・セラピストが実際に行ったカウンセリングの会話の逐語データの会話分析 (研究 D) については、すでに分析結果を論考として 2 本まとめており、こちらは、今年度の日本質的心理学会第 16 回大会での発表に向けて準備を進めている。また、早ければ今年度中に、その結果と内容を書籍として出版する予定である。

今後は上記の活動を行っていくとともに、継続して、外在化する会話やナラティブ・セラピーというカウンセリング実践の研究を継続していく予定である。このカウンセリングアプローチは、日本ではほとんど広まっておらず、研究はおろか、専門に実践をする機関も寡少である。実践と研究の場を確保するために、研究者は、ナラティブ実践協働研究センターというナラティブ・セラピーの実践や研究を行うセンターを立ち上げている (2019 年 3 月に一般社団法人として法人化)。今後は、同センターでカウンセリング実践に従事しながら、その実践データを通して、外在化する会話の効果やカウンセリング技法の研究をさらに進めていく。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ナラティブ・セラピーは日本においては教育、実践、研究の専門機関がなく、それに加えて、カウンセリングという実践的な技術を書籍等で学習するには限界があった。そのため、研究者自身がナラティブ・セラピーを習熟する必要がある、本研究に従事するにあたっては、専門の教育や研究を行っている海外の大学に留学することは必須であった。そのため、本プログラムに採用され、留学にかかる経済的なハードルを越え、ナラティブ・セラピーの専門機関となるワイカト大学での研究、教育の機会が得られたことは、本プログラムに採用されたことで得られた、最も大きいことのひとつである。同様に、やはり経済的なサポートを得られたことは、現地にてアルバイト等をせずに研究に専念する時間をもらえたこと、時に金銭のかかる研究や教育の機会 (例えば、ポルトガルでの学会発表や、ニュージーランド内での別都市でのカウンセラーの会合への参加など) に挑戦する後押しとなった。

研究の費用や時間に加え、海外の研究・実践・教育機関での研究活動を通して、現地の研究者やカウンセリングの専門家、実践家、教育者との交流の機会やネットワークが得られたことも、本プログラムで採用されたことで得られたことの一つである。この交流の機会を得る中で、自身の研究についてディスカッションする機会に恵まれ、研究の枠組みの再検討や精緻化が促進された。同時に、自身の研究とは内容やアプローチ、視点の異なる受入機関の研究に参加、協力することで、全く新しい視座を得るとともに、英語で海外の研究者と協働するという、日本では得難い経験をすることができた。現在は、逆に受入研究者や、現地で知り合ったカウンセリングの専門家、実践家を日本に招聘することも計画しており、このようなつながり、ネットワークが得られたことは、研究者の今後の研究という意味でも、また日本のカウンセリング実践研究の発展に寄与するという意味でも、大きな意義を持つと考えられる。

最後に、この 1 年の海外研究での経験を通して、日本以外のアカデミズムの文化に触れることができたことも、大きな収穫物の一つである。日本とは全く異なる文化、風土を持つ場所での研究や、研究領域としているカウンセリング実践の文化を経験することができたことは、研究者としてのスタンスを広くしてくれた。具体的に言えば、社会構成主義的な視点や、カウンセリングを文化的活動としてみる視点は、受入機関やニュージーランドの文化では強く広まっているにもかかわらず、日本ではまだほとんど育っていない。そのような視座を得られたことは、自身の研究の枠組みを発展させ、より多角的、柔軟な視点を得ることに役立った。